

巨人荒野

陽羅義光

第五部／第一章

孤猿坐啼墳上月
李白

絶望は死に至る病である
キルケゴール

二〇三二年、一月九日、午前八時。

ジェット噴射器を足に据え付けた郷田狂介とギャバンは、空中高く飛んでいる。
眼下に森が拡がっている。

「猿の群れは見えるかい」

ふたりだけの音声器で郷田がさげんだ。

「見えます、見えます、西に三百メートルほど」

ギャバンが指さした。

「見えた、見えた、行くぞ」

「はい」

「おい、おい、あのタケコプターはなんじゃ」

郷田が森の上空を飛ぶヘリコプターを指さした。

「パリ警察のマークがついていますから、おそらくセリーヌ警部でしょう」

「パリ警察の突撃予定日は、明日じゃなかったのか」

郷田はつぶやいた。

「ですから、今日は下見では」

「下見にしては、豪勢なヘリだね。

あれなら三十人は乗れる」

「何か散布していますよ」

ギャバンは指を天地左右に動かした。

「ああ、枯葉剤じゃないだろうな。

いまはともかく、近づくのはやめよう」

「何か睡眠剤みたいなものかもしれません。

猿が木から落ちていくのが見えます」

ギャバンは望遠鏡を使っていた。
「猿も木から落ちる、か。
いや呑気なことは云ってられない。
あんな高い木から落ちたら、いくら猿でも死ぬだろ」
「麻暮さんが落ちなければいいですけど」
「そうだ、七つ道具のなかに網がある。
万一の場合、網で救えないかな」
「網次第ですが、あの高さから落ちたら、網だって破けますよ」
「何とかならないかな」
「空中を飛んでいたら何ともなりません」
「よし、降りよう。
そしてすぐにセリーヌ警部にメールを送ろう。
散布しているものが、枯葉剤なのか睡眠剤なのか確かめて、それから次の手を考えよう」

ふたりは急いで地上に降りた。
ほとんど落下する感じだったが、運良く怪我はなかった。
メールを送ると返信はすぐに来た。
内容は、機密事項だから云えない、というものだった。
それから、猿退治は警察の機動部隊にまかせてくれ、と附記してあった。
郷田は、あの猿たちのなかに麻暮さんがいるかもしれない、とまたメールをいれた。
そういうことは計画のなかに含まれていない、と返信がきた。
「頭が硬い。
セリーヌの頭はセメントだ」
郷田は毒づいた。
「しかし、枯葉剤ではないようです。
そうならそうだと云うのも、セリーヌさんの性格ですから」
ギャバンは云うなり、マスクをした。
郷田もマスクをして、森の奥に向かって駆けた。
「郷田さん、危ない。
頭上注意、です」
ギャバンがさげんだ。
頭上から、猿が落ちてくる。
何匹も何匹も落ちてくる。
猿たちは、地上で凄まじい声をあげた。
あげるなり息絶えた。
郷田も凄まじい声をあげたくなった。

セリーヌの指示のもと、機動部隊員たちが、ヘリコプターからロープで次々と降りてきた。

やはり三十人ほどいる。

彼らは、まだいくらか息のある猿たちに、ナイフで次々とトドメをさしていた。

郷田が何をさけんでも、聞く耳を持たなかった。

そこへ、闇の奥から、音もなく登場した猿がいた。

(麻暮さんじゃないか)

郷田はおもわずさけびそうになった。

たしかに、猿の仮面をかぶった、麻暮正作である。

麻子をおんぶしている。

手にするのは川上ジェット。

「あ、あ、あれは」

ギャバンが郷田の身体にしがみついた。

「麻暮さん」

小さくさけび、郷田が一步二歩踏み出すのを、たしかに麻暮は眼で制した。

だが、郷田には一步の半分すら踏み出せなかった。

麻暮に向かって、機動部隊員たちが物凄い勢いで、猪突猛進したからである。

それはまるで、郷田の網膜の裏では、子連れ狼を襲う裏柳生一族として映っていた。

このときの情景を、郷田もギャバンも、

(終生忘れることはない)

とおもった。

麻暮の冷酷なほどの冷静さは、ほとんど人間とはおもわれなかった。

機動部隊員たちの催眠銃や棍棒の攻撃を、麻暮はすべて間一髪で避けた。

たとえば、催眠銃の弾丸が胸部にあと二十センチに迫ったとき、麻暮はその弾丸を瞬時に避けた。

同時に川上ジェットが噴射される。

たとえば、棍棒が前頭部にあと二三センチに迫ったとき、麻暮はその棍棒を瞬時に弾き飛ばした。

同時に川上ジェットが噴射される。

そして機動部隊員が全滅するのに、五分とかからなかった。

ヘリコプターが降下し、ロープでセリーヌ警部が降りてきた。

猿たちの屍骸を踏んづけながら、麻暮に近づいたセリーヌは、倒れ伏した機動部隊員たちの山を眺めながら、

「こんなことをして、麻暮さんといえども、ただではすみませんよ」

平然と立っていた麻暮は、

「あのね、猿の命と人間の命、そこにどういうちがいがあるといえるのかね。

尤も、ケケケ、あんたの部下たちはあと五分もすれば、みんな息を吹き返すんだ

がね。

残念ながら、お猿さんみたいに木から落ちてないから、命に別状はないよ」

皮肉っぽく云った麻暮は、川上ジェットを睡眠剤ピストルとして改良していたのだ。

「そうですか、となると」

「むろん正当防衛さ。

しかし君たちなら、こんな殺伐なことをしなくたって、お猿さんたちを捕獲できたんじゃないかね。

可愛いお猿さんたちを、軍事訓練の道具、いや玩具として使ったとしかおもわれないね。

パリ警察の醜態を見せてもらったよ、ケケケ」

「そうかもしれない。

でも、すべて麻暮さん流で、やらせてもらったのです。

殺伐という意味は、詳しくは解りませんが、その言葉は麻暮さんの専売特許ではありませんか。

もしもパリ警察が醜態なら、その醜態グループを一網打尽にした麻暮さんは、美態になるわけですか。

しかしどう見ても、そのご活躍とお姿は、醜態の親分としかおもえませんが」

セリーヌも皮肉っぽく云った。

ふたりは睨み合い、郷田とギャバンは息を呑んでいた。

二〇三二年、一月九日、正午。

麻暮正作は、ホテルメグレの部屋にいる。

麻子にひさしぶりのミルクを飲ませている。

周りには、郷田、ギャバン、マドレーヌ、カトリーヌである。

ルームサービスでランチセットが運ばれた。

「よくセリーヌ警部が解放してくれましたね」

フランスパンをかじりながらギャバンが云った。

「あんな嫌味なことを云っていたけど、セリーヌ警部はじつは麻暮さんに一目置いているのさ」

郷田が云うと、猿仮面から鉄仮面に替えていた麻暮は苦笑して、

「ボクを逮捕するとね、機動部隊がボクにやられたことが、公になるから、それを怖れたんだよ。

パリ警察にも、セリーヌ警部にも面子があるからね。

髭は立派だが、ケツの穴の小さいやつさ。

ボクのことを醜態の親分なんて云っていたな。

まだ日本語の勉強が足りない」
するとマドレーヌが口をはさむ。
「どちらにしても、ダーリンが無事だったのが、わたしにとってはすべてなのよ」
するとこんどはカトリーヌ。
「姉さんは、麻暮さんが死んだら、自分も死ぬ気でいたのよ。
絶望より死を、ですって」
麻暮は声を強めて、
「それはいけない。
ボクなんかいつ死んでも、不思議はないんだから。
それに、マドちゃんは、パリの人びとのために、大切な存在じゃないか」
「姉さんの思想は、大勢のためより、一人のためよ。
そうでしょ」
カトリーヌが云って、郷田のほうを見た。
「そうなんだ、そうなんだね。
カトリーヌも、ぼくも、一人のためより大勢のために、という性格なんだ。
そういうふたりが、結婚なんかできるわけがないよ」
郷田は自嘲気味に応じた。
カトリーヌは静かに首をふりつつ、
「郷田さんを裏切ってばかりいるけれど、こんなわたしと郷田さんが本当に結婚してくれるなら、こんな嬉しいことはないわ」
郷田とギャバンは顔を見合わせた。
ふたりとも、カトリーヌのいまの言葉を、間に受けられないでいる。
「ケケッケ。
郷田さん、お互い、もてる男はつらいね」
麻暮が茶化した。
なんとなく郷田は救われた気がした。
「もてるのは、いまのうち。
あしたはどうなるか、わからない」
郷田はつぶやいてから、紅茶を飲みほした。
「もてるもてないの話はさておいて、みんなこれからどうしますか」
ギャバンが聞いた。
「どうするって、どういう意味なの」
マドレーヌが聞いた。
「すくなくとも、このままパリに残るか、日本に帰国するのか、そのふたつの選択肢はあるよね」
「わたしはダーリン次第ね」
マドレーヌが断固とした口振りで云うと、麻暮は真顔で、
「ボクはとりあえず、猿たちの様子を確認めたい。
どれくらい死んだのか、どれくらい生きているのか。」

そして、これからどうするのか。
ずいぶんと世話になった仲間だから、このままの状態にしてはおけないね」
すかさずマドレーヌが、
「それならわたしも行くわ。
手当てすれば助かる猿もいるでしょうから」
「そうかい、それは助かるよ。
人助けのプロ、いや、こんどは猿助けのプロ、マドちゃんなら百人力だ」
「ひやくにんりきって、ひやくにんのりき」
「まあ、そんな意味は関係ない。
ボクはマドちゃんを頼りにしているっていうことさ」
その言葉に、感極まったマドレーヌは麻暮に抱きついた。
「おいおい、麻子がヤキモチやくからやめてよ」
「やめない、やめない」
カトリーヌは、こんな姉を見たことがなかった。
姉は常に沈着冷静だった。
仕事に対しても男に対しても。
(それをマネしてきたけれど、ムリがあったのかもしれない)
と、カトリーヌは思っていた。
「それならわたしは、そのあいだアサコちゃんのセワをしているわ」
「ありがたいが、ボクは修羅の道を行く人間だ。
セリーヌの言葉で云えば、醜態の親分だ。
麻子は背負っていくから、カトちゃんは郷田さんと一緒に日本に行きなさい」
郷田に対する麻暮なりの思いやりだった。
「僕は麻暮先生のおかげで、鎌倉探偵事務所を開いたばかりだから、帰らせていただきます。
郷田先生にはまだ教えていただくことがいっぱいありますから、一緒に帰ってほしいのです」
ギャバンが云うと、カトリーヌもそれ以上パリに残るとは云えなかった。

二〇三二年、一月十日、午後三時。

麻暮はマドレーヌの運転する（と云っても自動運転車だが）ワゴン車で、ブローニュの森へ向かっている。
郷田とギャバンとカトリーヌを、たったいまパリ空港に送り届けたばかりである。
マドレーヌが聞く。
「聞きにくいし云いにくいかもしれないけど、お猿さんたちとどういう生活をしていたのですか」

鉄仮面を猿仮面に替えていた麻暮は、
「信じられないかもしれないが、仲良く暮らしていたよ。
木の実を食べ、猿酒を飲み、サーカスをやっていたんだ。
話も通じたし気心も知れたし、何も不都合はなかったね。
人間がもともと猿だったって説を、初めて信用できた」
「まさかダーリンが、お猿さんたちのボスだったわけではないわね」
「それがさあ、たまたまボスが急死してね。
看取ったボクがボスになってしまった。
だから、なかなか抜けられなかったし、これから行くのは、ボスとしての責任もあるんだよ」
「あらまあ、それでメールも通じなかったのね」
「それは、木から落として壊してしまったからなんだ。
猿は木から落ちないが、スマホは落ちる。
ケケケケッ」
「このお面はどうしたの」
「死んだ前のボスの、顔面をはがして作ったんだよ」
「おやまあ、残酷」
「残酷なもんか、死んだ前のボスの遺言みたいなものらしい。
らしいと云うのは、はがしたのも作ったのも、かれらがやったんだ」
「お利口さんね」
「そうなんだ、人間よりも利口なところもある。
そういう猿たちを殺戮する人間は、猿以下だ。
さて、どのくらい生き残ってくれているやら」

車を降りて歩きだすと、猿たちの屍骸が山積し、すでに死臭が立ち籠めていた。
鳥の群れに喰われたとおぼしき、内臓の一部が散乱していた。
「ちくしょう、連中は、埋葬すらしてくれなかったのか」
憤怒と悲愁のつぶやきを漏らし、麻暮は猿の声を真似て、仲間を呼んだ。
けれども、反応はまったく無かった。
「全滅したんですか」
恐る恐るマドレーヌが聞いた。
「いや、不幸中の幸いで、見知った猿の顔がいくつか無い。
おそらく別の土地へ移ったんだろう」
「書き置きでもあると解るのにねえ」
マドレーヌが何気なく云ったとき、麻暮は目の前の木からぶらさがっている物を見つけた。
「あった、あったよ、書き置きが」
「えっ、それなーに」
「ボクがかれらにあげた、胡桃割り人形だよ。」

もともと麻子の玩具だったもの。

いままでかれらは、木の実を食べるまで、足で踏んづけたり石で叩いたり、あれこれ苦心をしていたものだったが、この胡桃割り人形で簡単に木の実が食べれるようになったのさ」

「でも、首吊り人形みたいね」

「ケケケ、そうではないよ。

ほら、首のところのヒモがゆるいだろ。

これは、胴を縛ったヒモがずれたんだね」

「なら、これはどういう意味かしら」

「つまり、かれらは木の実ではなく、別の食べ物が手に入る土地へ移ることにしたのさ。

だからこれは、いままでありがとうという、かれらのボクに対する書き置きさ」

「賢いお猿さんたちね」

「賢いかどうかは解らないけれど、かれらは人間たちよりも、義理人情を大切にしているんだ」

「泣けるわねえ」

「泣けるけど、泣かない。

かれらの新天地移動を祝福してあげよう。

さて、マドちゃん、ちよいと力仕事を手伝ってくれないかい」

「いいわよ、どこかに大きな穴を掘って、このお猿さんたちのを埋めるのね」

「そう、そしてそこを〈猿塚〉と名づけよう。

大きな石を見つけて、そこに日本語とフランス語で、〈猿塚〉と彫ろう」

「わかりました」

第五部／第二章

君死にたまふことなかれ

与謝野晶子

私は魂である

ユゴー

二〇三二年、一月十三日、午後三時。

郷田狂介は書斎に居る。

原稿はすでに三百枚を越えた。

けれども郷田には、まだ序章さえ終わっていない感じがしている。

この作品の主人公にすえるはずの、麻暮正作はまだ登場してはいないのだ。

ギャバンはすでに鎌倉探偵事務所に移り住んだ。

おそらくカトリーヌは手持ち無沙汰だろうと、郷田は心配している。

だが郷田は、書齋を出ることができない。

郷田は考えに考えている。

悩みに悩んでいるといってもいい。

はたして自分は、何を書きたいのか。

山内参三のノンフィクション・ノベル『死んだる団』は超ベストセラーになった。

けれどもそれは、小説がまだよく売れた時代の話だ。

ノンフィクション・ノベルにかぎらない。

十年前までは売れない小説群のなかでも、まだそこそこ売れ筋であった探偵小説もミステリー小説も時代小説も、いまやほとんど売れない。

もともと売れない純文学は、まったく売れなくなった。

芥川賞受賞作品なんかは、話題性で売れても、それっきりで、三年もすれば、その作品や作者をだれも思い出せない。

だから、内実は純文学本でも、これはファンタジー小説だとかオカルト小説だとか銘打って売ろうとする。

それでも騙される読者（いや購買者）は、年ごとに激減している。

小説はもちろんのこと、だいたい活字が売れないのだ。

書店の多くはつぶれ、あるいは漫画本書店に変貌し、図書館も漫画本のコーナーを三倍に増やした。

若者は活字に触れようとせず、大手新聞の発行部数も半減し、地方新聞社は倒産が相次いだ。

スマホとパソコンさえあれば、欲しい情報の総てが入るのだ。

そんな社会状況のなかで、いまさら作家になろうとしている自分は、いったいどういうものを書きたいのか。

かの『死んだる団』の続編を書きたいつもりで書きつづけているが、山内参三に倣ってノンフィクション・ノベルを書く気は、はじめから無かった。

とにかく書かずにいられない気持のなか、書くべき作品を書こうとはしている。

その作品は半世紀以上前にはめちゃくちゃ売れた、いわゆる大衆娯楽小説ではない。

郷田はそう確信している。

書いた作品の本の印税で生活できないなら、

「作家」

とはいわないとだれかが云っていた。

それなら自分は、なろうとしてもなれないし、そういう意味の作家になろうとしているのではない。

そこまでは自覚した。

その先が出てこない。

すると、

「文学」

という言葉が、つと脳裡をよぎった。

そうだ、自分は、作家ではなく文学者になろうとしているのだ。

「文学は死んだ」

と、柄谷行人をはじめ、当時の有力な文芸評論家が言い出してから、何十年経ったであろうか。

この断定を頭から信じたわけではなかったが、漠然と、

(これでいいのだ)

と感じたものである。

「神は死んだ」

と云ったニーチェのもじりであろうが、哲学好きの文芸評論家に解っていなかったのは、神は死んでいるからこそ畏敬できるからである。

これでようやく文学も、神の領域にはいったと、郷田はおもったものである。

(自分は畏れ多くも文学者になろうとしているのだ)

郷田は震えた。

作家として売れる本にしなければという、頭の隅っこにある思いは完全に消えた。

生涯生活するだけの貯えはあるし、もしもカトリーヌや麻子を引き取ることがあっても、この屋敷を売れば何の問題もない。

ともかくこの決断は、郷田を楽にした。

書きつづけるうえで、じっさいは楽ではなかろうが、気持のうえで、すくなくともおおいにすっきりとはさせてくれた。

「これでいいのだ、これでいいのだ」

つぶやきながら郷田は、書斎のなかをぐるぐる回った。

二〇三二年、一月十三日、午後七時。

郷田は本邸に戻ろうとしている。

戻って、カトリーヌのためにシンプルで美味しい夕食を作り、それからギャバンの鎌倉探偵事務所へ、開設祝いを持っていくつもりである。

「ただいま」

と大声で云って、入っていったが、いつもなら二階にいても、

「おかえり」

と云って降りてくるカトリーヌの声がない。

それでも郷田がそれほど驚かなかったのは、いつか遠からずいなくなる気がして

いたからである。

郷田はカトリーヌに連絡をすべきかどうか、ソファに力なくもたれながらスマホをいじっていると、

「ただいま」

とカトリーヌの声。

郷田は平然を装って、

「おかえり」

と云った。

カトリーヌは手にレジ袋をさげていた。

「買物かい」

「たまにはわたしがつくろうとおもいます」

カトリーヌは照れ笑いをした。

「おや、それは嬉しいけど、何を作ってくれるのかな」

「パリふうカレーライスです」

「そういうものがあるとは知らなかったねえ」

「そういうものはないけど、つくってみたいのです」

云いながらカトリーヌはキッチンにはいった。

けれども、一時間経っても二時間経っても、パリ風カレーライスはできあがらなかった。

郷田はマラルメの詩集を再読していたが、すべて読み終わると眠くなり、キッチンから漂ってくる淡いカレーの匂いに誘われたのか、眠るつもりはなく眠ってしまった。

カレーとはちがういい匂いがして、艶めいた声が聴こえる。

「おまたせしました」

跳ね起きると、カトリーヌの満面の笑みがあった。

「ありがとう」

寝惚け声で云いながら、壁の飾り時計を見ると、九時をすこし過ぎている。

パリ風カレーライスは二時間かかる労作なのだった。

「ひゃあ、おいしそうだこと」

ご機嫌で食べはじめた郷田は、お世辞抜きで、

「うまい」

おもわずさげんでいた。

カトリーヌもたいへんなご機嫌ぶりで、ふたりだけであっても食卓は賑やかだった。

カトリーヌの喜ぶ顔を見たくて郷田は、

「おかわり」

を云った。

丁度そのとき、カトリーヌのスマホにメールがはいった。
「マドレーヌでしょう」
とつぶやきながらスマホをのぞいたカトリーヌが、
「〇〇〇〇」
と歓喜のさけびごえをあげ、頬がすこぶる紅潮した。
しばらくして郷田が聞いてみると、カトリーヌにとってこれ以上ない吉報が届いたのである。

まだ麻暮や郷田と知り合う前のことである。
ヴィクトル・ユゴーの世界的名作『レ・ミゼラブル』がオペラ座で上演されることになり、今回はジャンバルジャンが主役ではなく、養女のコゼットをヒロインにした舞台で、主役のオーディションも大きな話題になっていた。
もともと女優志望だったカトリーヌに、オーディションの参加を勧めたのはマドレーヌである。
あれこれ下準備から苦労はしたけれども、最終オーディションから数カ月も経っているのに、すでに諦めていたところにこの通知がきたのである。
いずれにしても、パリのトップモデルであるカトリーヌが、その主役に決定したということは、パリのジャーナリズムでも大騒ぎになるはずである。
郷田はカトリーヌとの別れを予感しながらも、共に喜び、ギャバンの鎌倉探偵事務所祝杯をあげる約束をした。

二〇三二年、一月十三日、午後十一時。

ギャバンは鎌倉探偵事務所、郷田とカトリーヌを待っている。
車が止まる音がすると、ギャバンは寒風吹きすさぶ外へ飛び出した。
だが、またちがった。
三度目の正直で、郷田のBMWを見ると、ギャバンは満面の笑みで迎えた。
車を駐車場にいった郷田は、右手に祝杯用のシャンパン、左手に事務所開設祝いの飾り時計を提げていた。
それは郷田邸の飾り時計よりも、さらに豪華で高価なものであった。
「ぼくの事務所には高級すぎやしませんか」
ギャバンが恐縮して云うと、郷田は小ぶりの部屋を見回して、
「探偵にとって、時間というものは、敵にも味方にもなるものだ。
しかもこの時計は、タダの時計ではない」
「それはタダどころか、けっこうな金額でしょう」
「そういう意味ではない。
この時計は、じつは隠しカメラも隠しマイクも隠し金庫も内臓している」

「げっ、もしかして、その金庫のなかは」

「へっ、金塊がぎっしり。

僕のアシスタントとしてずいぶん危険な目にあわせたから、退職金だね。

でも金庫の開け方は、探偵的カンでやってみてよ」

「ありがとうございます。

でもぼくなんか、こんなに優遇されていていいもんなんですかねえ」

「探偵ってやつは水商売だよ。

麻暮さんや僕が、その商売に成功したのはたまたまさ。

君にたまたまがくればいいが、こなかったときはこの金塊で商売替えを勧めるね」

シャンパンで乾杯をしたあと、ギャバンはおもむろに聞きにくいことを聞く。

「郷田さんと、カトリーヌちゃんの、ご結婚は、いつでしょうか」

郷田はわざと明るく笑いながら、

「君、驚くなよ。

カトちゃんは、オペラ座の『レ・ミゼラブル』の主演を演るのさ」

ギャバンはシャンパンをこぼすほど飛び上がって、

「いまパリでは、その芝居の噂で持ちきりですよ。

さっきスマホで見た、トップ・モデルが主演ってニュース、あれカトリーヌちゃんだったんですかあ」

「じつは、そうなんだ。

結婚どころか、結婚する前に離婚さ」

郷田がやはり笑いながら云うと、カトリーヌのほうは涙ぐんで、

「ごうたさんは、それでいいのですか」

「いいもなにも。

カトちゃんの夢は、結婚じゃないだろう、女優だろう。

そこを見誤ってはいけないよ。

つまり、人生の選択をまちがえちゃいけない、ってことさ。

ただし、条件付きだがね。

僕と別れるついでに、荒野大人ともお蝶さんとも、きっぱりと別れるんだよ」

「はい」

カトリーヌはきっぱりと云った。

(これでいいのだ)

郷田はおもう。

(麻暮さんが僕の立場でも、きっと同じことを云ったはずだ)

そうおもうことが、唯一郷田の慰めであった。

「だから、カトちゃんの門出に、もう一回乾杯しよう」

「カドデ」

カトリーヌが聞いた。

「つまり、人生の新しいスタートということさ」

以上の郷田の説明に、ギャバンは納得がいかない様子だった。
「美男美女の国際結婚を期待していたんです。
ううん、いまでも期待しているんです。
だって、明治時代じゃないんだから、〈フランスはあまりに遠し〉ってわけでも」
「朔太郎だね。
ギャバン君は日本文学にも詳しいのか。
明治にかぎらず、大正でも昭和でも平成でも令和でも、遠いんだよ。
フランスが遠いんじゃないくて、憧憬が遠いんだよ」
「ショーケイ」
「あこがれの世界は、どんな時代でも遠い」
郷田が云い終える前に、カトリーヌが口を挟む。
「わたしはまだ18です。
じゅうねんたって28になったら、あなたとケッコンしたい」
「僕は還暦になっちまう。
でもまあいいか、十年くらいなら待てるよ。
麻暮さんの歳を考えたら、僕なんかまだ半分だもの。
でもフランスは、日本みたいな結婚制度はないんだから、深く考えないでいいんだ。
ぼくがカトちゃんを想って、カトちゃんがぼくを想っているあいだだけは、ぼくたちはパートナーさ。
尤も、現代はパートナー契約なるものが流行っているけれども、ぼくはそんなものが必要な関係なら、パートナーにはならないほうが良いという考えだね」
郷田が苦笑したので、カトリーヌもギャバンもつられて笑った。

二〇三二年、一月十五日、午後一時。

カトリーヌと成田空港の発着ロビーでサヨナラした郷田は、引き上げずに空港内のレストランに入って時間をつぶした。
カトリーヌと入れ替えに、パリから帰国する麻暮と麻子を迎えるためである。
郷田はスパゲッティを食べると、アップルティーを飲みながら、この待ち時間をつぶすために持参した月刊文芸誌を広げた。
月刊文芸誌のほとんどは廃刊になっていたが、二つ三つと新しい雑誌が生まれてきていた。
しかしそれは郷田が望んでいた純文学雑誌ではなく、スリラーとかホラーとかオカルトとかいう冠がついた、マニア向けのものではなかった。
郷田はそのなかで、『月刊幽霊』という、いかにも創刊号のみで廃刊になりそうな、下品な装幀の雑誌を、単なる気まぐれで買ってみたのである。

冒頭は、大腹小臍というふざけた筆名の作者の、『憂霊』という五十枚くらいの短編であった。

* * *

憂霊

大腹小臍

夢は 真冬の追憶のうちに凍るであろう
そして それは戸をあけて 寂寥のなかに
星くづにてらされた道を過ぎ去るであろう
(立原道造『のちのおもひに』)

二十歳で死んで、もう半世紀だから、ずいぶんと小生も年をとったものである。目はかすみ、耳はとおくなり、鼻もきかなくなった。そんなことは十年前（還暦になったとき）から覚悟していたのでまだしも、全身に原因不明の麻痺があるから、肌でかんじる快感や苦痛が皆無になったのは、なによりも残念無念なり。【手を翳す事なく雨知る禿頭】【禿頭抱いて寝てみりゃかわいいものよどこが尻やら頭やら】なんて独りゴチていた三年前が懐かしいくらい。舌の感覚もないものであるから、これでは、闇夜で嘗めると石と泥のちがいもわからぬ。五感が命の小生にとって、この有様は死に価する。臥薪嘗胆の末の臥墓嘗脛。小生のお墓にお参りにきてくれる女学生たちの、頬を撫でたり、ふくらはぎを嘗めたりする、実感を喪ったのであるから。麻痺状態のままやったら、頬を殴りかねないし、ふくらはぎに噛みつきかねない。(あら、微風が頬を撫でたわ)(まあ、草花の露がふくらはぎを嘗めたのね)せっかく女学生たちはそうかんじてくれているのに。かの有名な美容整形医師がこう語っている。「若いお肌の質感というものは、どんなことをやっても再現できない」賞味期限内のコラーゲンと、媚薬も適わぬフェロモンと、古代より伝わる性ホルモンと、正体不明の乙女エキスとが皮膚を内側から、ふくりふくりと圧迫してくるこの事態は、医師に技術の限界を知悉させ、わが身に邪淫の限界を覚悟させる。理屈はともかく、いまだに女学生たち、正確には、女子中学生、女子高校生、女子専門学校生、女子短大生、女子大学生、しかもみんな十代から二十歳までの乙女たちが、本来なら門前雀羅の小生のお墓にやってきてくれて、綺麗なお花、豪華なお花、たまに質素なお花を供えてくれるのは、ありがたや。どれも春夏秋冬を問わず秋桜が中心。たしかに小生の詩には〈コスモス〉の語が頻出するのであるが、それは花ではなく〈宇宙〉の意である。そんなことはどうでもいいか。小生の球状の墓石を、小生の頭よりもつるりんと磨いてくれて、五十年経っても苔むしたお墓の風情がでてこないところは、ありがた迷惑。【どこやらに雀の声きく霞かな】乙女たちといったが、どれほどブスでも十代の女性たちは、くだんのお肌をもっているというだけで、乙女なのである。お墓の前で掌を合わせたり泪ぐんだり、ぴひゃぴひゃとスマホで撮って、メールで送る。こんな無邪気なコメントを添えて。「アタシ

しちゃった／大腹小臍の／オ・ハ・カ・と／妊娠しちゃったりして」妊娠はせずともたしかに発情なんかして、小生の墓石に胸や下半身を擦りつけたりする、けしからんほどありがたい乙女も、たまたま出現したりする。大腹小臍なぞという、いいかげんな筆名と、身分不相応の立派なお墓をつくってくれたのは、名前は伏せるがホモセクシャルの大詩人。お墓の裏には、その泰山北斗の大詩人によるこんな墓碑銘が刻まれている。[天涯孤独のまま／陋巷に窮死した美貌の天才詩人／弱冠二十歳にして／此処に眠る]この立派すぎる銘には、嘘を嘯いている箇所がふたつある。つまり[美貌]及び[天才]である。一般によく「若さ」と「美貌」というが、若さはイコール美貌なので、十代から二十歳にかけての男のほとんどが、美貌とやらをもっているのである。それが三十歳四十歳になって、むさくるしいオヤジに成り果てる。たとえば詩人なら、ランボオの写真をみればわかる。ランボオをだしてヴェルレーヌをださないとヤキモチがこわい。【秋の日の／ヴィオロンの／ためいきの】これも謙遜ではないが、夭折したから天才にされただけで、天才かどうかは二十歳でわかるはずもない。二十歳まで書いてきた詩人の詩よりも、七十歳まで書いてきた詩人の詩のほうがよっぽど優れているし、天才的であることは歴史が証明している。『花伝書』にいう。「若い人の美しい芸は当たり前。年を重ねて美しい芸を演じることこそ大切である」いままで〈春のような乙女〉とか、〈乙女のような春〉なんてことを書いてきたのであるから、赤面ものである。〈冬のような乙女〉とか、〈老女のような春〉なら、まだ許せるけれども。感傷の青春が疾うにおわったいまなら、いますこしましな詩が書けるはずなんであるが、むろんのこと発表する場がない。頭のなかで書いてもつまらんからすぐ忘れる。ただそんな甘ったるい詩を書いてきたから、そして同情心を煽る短い一生を送ってきたから、半世紀経っても女学生にもてるのであるが、半世紀前の乙女がそのまま、現代の女学生というわけにはいかぬ。わざわざお墓のある秩父の山中までやってくるには、昨今流行りのパワー・スポットとしての、お墓ブームとも無関係ではないからである。このあたりは、秩父困民党の首謀者たちがつどった場所だなんて、乙女たちは知らないし知りたくもなかろう。乙女たちにとって、お邪魔虫いがいのなにものでもない寺男がやってくるまで、いつまでも小生のお墓の前でお喋りし戯れている。寺男は猪に雑巾をかぶせた風体なのであるが、小生とちがって不真面目でも助平でもない。いま小生が、彼女たちの前に現れたら、この寺男そっくりの風体なので、即刻卒倒するにちがいない。こんな小生でも三十年前の恋愛、いや「変愛」を告白することができる。そのころ小生は四十歳で、幸運なことにこの世にはスマホなんてものはなかった。だから彼女にスマホでお墓を撮られることもなかった。小生はお墓の中になんかいないのに、スマホでお墓を撮られるのは気分の良いものではない。バカチョンカメラなら良いのかというと、感覚の問題だから良いのである。【墓に唾をかける／君たちは宙に墓を掘れ／そこなら横になるのに狭くない／僕は宙の墓に眠る／この浮遊は心許ないが／元来人間は地に足がついていないものなのだ】だいたい鼠とか土竜とか、蚯蚓とかふんころがしとかが、偕老同穴のつもりとなって跋扈する、こんな穴ぼこだらけの穴ぐらになんかいられるものか。生身の人間ではなくなると、生

身の人間という生物の気持わるさは、ふんころがしの敵ではない。眼から涙、鼻から汁、口から涎、皮膚から汗、生殖器から尿と液、なんというおぞましき。詩人だって（中原中也だって）そらあ骨くらいはある。【ホラホラ、これが僕の骨だ／生きていた時の苦労にみちた／あのけがらわしい肉を破って／しらじらと雨に洗われ／ヌックと出た、骨の尖】骨は、小生の歴史ではあっても、小生ではない。いわば小生が地上に脱ぎ捨てた抜殻である。余談はさておき縦横幅百メートルの、墓場空間のみが小生の存在空間で、正岡子規じゃないけれども、わが小宇宙ということになる。小さな寺と小さな墓地と、寺男の住むとても小さな小屋があるばかりである。周りは松と杉を中心とした樹々に囲まれ、小生はこの一帯を眺めるたびに（とはいえ眺められるのはこの一帯のみなのであるが）「望郷」という言葉を思いだす。言葉だけではなく、生まれ育った美しい村を思いだす。二十年の生のうちで小生がほんとうに小生であったのは、この美しい村での五年間にすぎない。都心からバスか車で一時間半、渋滞のときは二時間半のこの小宇宙で、撫でる嘗めるいがいの実感は、のこるはスカイダイビングくらいなもので、それでもこの歳になるとうまく遊泳できないから、墓石に頭をぶつけて死ぬる思いをすることもある。むろん病院にはいけないし、氷嚢を頭に乗つけることもできない。こういうときこそ酒がほしい。おう酒じゃ酒じゃ、酒もてこい。【李白一斗詩百篇】映画館か競馬場でもあれば、退屈の半世紀をすごさずともよかったのに、寺男がしっかりしているからエロ本一冊落ちてやしない。目も耳も鼻もこよなくよかったころは、四季折々、朝昼夕に、樹々の色が変わるのが、ささやかな刺激であった。樹々を飛び交う鳥たちのさまざまな囀が刺激療法であった。樹々が風に揺れるたびに漂う香りが刺激伝導体であった。不幸にもいまは、暗黒のまたは深紅の塊が、邪悪な病根かウイルスの発祥地、としかかんじられない。雑草が騒ぐと、そこに蠢いているのは、絡み合う色とりどりの蛇たちである。おそらくじゃれあい、いつくしみあい、むつみあっているのであろうが、そのものたちが、地獄の使いである青鬼、赤鬼、白鬼、黄鬼、緑鬼にしかみえない。一般によくいわれる、「年とると被害妄想になる」というのは、こういうことかと察せられた。『方丈記』にいう。【魚と鳥とのありさまを見よ／魚は水に飽かず／魚にあらざれば、その心を知らず／鳥は林を願ふ／鳥にあらざれば、その心を知らず／閑居の気味もまた同じ／住まずして、たれかさとりむ】生物は主観的にできている。死んだら客観的になるかと考えていたがそうではなかった。ますます主観的になるのである。わが小宇宙は、魚にとっての水でも鳥にとっての林でもない。悔恨と汚辱と邪淫と嫉妬と不安と不満の混濁した空気のなかに、ゆらんゆらん小生は浮遊している。こどものころは、冷蔵庫と洗濯機と掃除機が三種の神器であった。そののちは持ち家と高級車と最新パソコンが三種の神器である。そんな空虚なモノがないだけでしたが、タマシイというもっと空虚な空気が、放射性物質さながらに蔓延している。タマシイといったが、本当にそう名付けていいかは小生にもわからない。何せ此処では99、99%がわからないのだから。中東戦争で祖国を追われたパレスチナの女性詩人（ファドワ・トゥカン）ほど小生は人間ができてはいない。【この地の上で息絶え／この大地に埋められ／この土に還るのなら

／それでじゅうぶん／そうすれば芽生えが一輪の花となって／わたしの祖国の子どもと戯れよう／祖国の土に抱かれて／一塊の土になって／一本の草の芽／一輪の花になるのだから／わたしはそれでじゅうぶん】しかし小生にとって、祖国と呼ぶべき祖国はありや、なしや。そうそう彼女の話ね、彼女じゃなんだから、とはいえ名前を知らないの、ここでは仮に、夢子とでもしておこうかな。じっさい小生にとって、夢の子であった。小生の絶望が無限であるのと同じ質量で、小生の空想力が未だ無限であった時代の話である。どこからか声がきこえる。エリオット氏か、ゲロンチョン。【お前には若いときも老年もない／まるでそれを夢みる／食後の昼寝のようなものだ】いや夢ではない、シエスタでもない、夢子はゆめではなく、うつつであった。ここで夢子について説明をさせてほしい。さてよ、説明なんてものは詩人の大敵である。一行ですむ方法。立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。大昔の人は夢子のために、あらかじめこの見事な形容をつくっておいたのである。はてさて夢子は、インスピレーションというのか、当時流行りのスピリチュアル・スピリットというのか、そういうものを生まれつきもっている乙女で、小生の存在というか非在というか、非在の存在というか、それに気づいてしまって、暇さえあれば暇がなくとも、この墓場にやってきたものである。というのは天使が降りてきそうなほどとっても空が低い朝に、小生が夢子を見る眼付を、できるかぎり馴れ馴れしくしたものであるから。室生犀星のこんな言葉をたまたま知っていたのでそうしたのである。「死んだ人というものは、生きている人間には瞬間的では、ちょっと見なれない眼付を夢などで見たときに示すものである」四十歳という男盛りであったから、なんとか夢子とボディランゲージとやらをしたくて、小生もじつにたまらなくなってしまう。みなさんは知らずともお気づきであろうが、小生は五年間肺を病んで死んだ者なので、かつてそういうことをしたことがなかった。そういう乙女がまったくいなかったわけではなく、野暮な医者に性的興奮は禁じられていたし、キスだって、すれば相手に病気が感染してしまうことくらいは知っていたものであるから。犬猫や鳥類相手にだって、やったことなし。莫迦は死ななきゃなおらないのとおなじで、病気は死ねばなおる。夢子と、だからそういうことをしたかったのである。夢子のほうもまちがいなくそうだったのだと、思い込みいじょうの確信をしている。十九歳のときの年上の女性とは、恋愛ではなかった。憧れにすぎなかった。真綿色したシクラメンほどすがしいその人には、十人並の夫も娘もいた。その人の弟が若くして結核で亡くなったために、その代用品として、小生は可愛がられたのであった。子兎の前歯そっくりのそれで、かりりんぼりりと、小生は食べられたかった。若かったあのころ、なにも怖くなかった、ただ貴女の優しさが怖かった。なにをしてくれたわけでもなく、其処に在るだけで優しさを醸しだしていた。優しいたたずまいは、想えばお墓の前の夢子のそれによく似ていたのである。あるとき、それはまあ、〈乙女のような春〉の日であったが、明鏡止水のところで小生が唇を突き出すと、夢子ったら道徳心も警戒心も羞恥心も、髪にとりついた羽虫といっしょにふりはらい、可愛いあごを挙げ、その可憐な唇を天空に捧げたものであった。キスをした。小生にとっては初めてで、夢子にとっては初めてかどう

かはわからぬまでも、唇にいささか強い一瞬の風が吹きすぎた感触であったであろう。至福のときが一週間で八回あった。夢子はあるとき3のかっこうをした。8になるのを待っているかっこうである。そののちの日、まさしく〈老女のような春〉の黄昏れどき、夢子は墓の前に、いや霧のなかにたたずんでいた。なぜか小生は気づいたのであった。気づかなくともいいのに気づいてしまったのであった。夢子はここで死のうとしていた。夢子は鋭利なカッターを手にしていて。うろたえた小生は失禁し脱糞しそうであった。夢子がもしここで死んでも、ここで一緒にすごせるわけではない。太宰治の墓前で自殺した、太宰の弟子の田中英光は、生前の太宰をよくわかっていて。夢子は、生前の小生をわかっているわけではない。たった一冊遺した貧しい詩集で小生を知っているだけなので、完全に小生の正体を誤解している。神も仏も信じぬ小生なのに、ふとハイネの詩句を口ずさんでいた。【神きみを護りたまえと／手をきみの頭に置いて／祈りたき思い湧き出ず】このとおり。小生はロマンチックな詩人ではない、ドラマチックな詩人ではない、いうならばセンチメンタルな詩人であって、夢子があと二、三年生きればその真実に気づき、おのれの浅はかな過ちに驚き、挙げ句興醒めするはずなのである。なんとかそれまで生きてもらえれば、夢子もそののちは幾年でも生きられる。青春の孤独とか乙女の悲哀なんてものは、そらあ、生身の異性に烈しくだきしめられれば雲散霧消するものである。生身の、そう、小生は生身でないことに、苛立ち、悶え、地団駄ふんだ。しかも「涅槃で待つ」なんて、いかげんなことはいえない。四十歳になってようやくわかってきても、もはやとりかえしがつかぬ。みっともなくてもいい、みじめでもいい、かっこわるくともいい。夢子が萩原朔太郎であってくれればと、小生はほんのひとときおもったのであった。【きのふまた身を投げんと思ひて／利根川のほとりをさまようしが／水の流れはやくして／わがなげきせきとむるすべもなければ／おめおめと生きながらへて／今日もまた河原に來り石投げてあそびくらしつ】嗚呼だが夢子は行動を起こし、小生は震えに震えた。正真正銘、初恋のひとは、あまりにもあっさりとして死んでしまった。だれかがささやく。西脇氏か、アポカリプス。【生物は永遠の中に生れ／永遠の中で死んで行く／ただそれだけであると／いうことは／人間の唯一の栄光で／生物の唯一の哀愁だ】こんなことでいいのか、こんなことがあっていいものか。神仏に祈っても蟻螂之斧、蟬のよにきく耳もたず独り哭き。涙の川、涙の太陽、涙の渡り鳥。【天に在りては願わくは比翼の鳥となり、地に在りては願わくは連理の枝とならん】立場も顧みず、ふたりの未来予想図を想い描いていたのに。霧は雨になり、春の雪になった。夢子の遺体は雪に包まれた。【夢子を眠らせ、夢子の屋根に雪ふりつむ】ロマンチックでもドラマチックでもない、莫迦げたセンチメンタルな光景であった。アランじゃないが「悲しみや寂しさなんて簡単な病気にすぎない」のに。ちょっとばかり病気をがまんしていれば、いつのまにか治ってしまうのに。ムッシュー・テストはさげふ。「ひとりの人間に何ができるか。ひとりの人間に何ができるというんですか」朝まだき、遺体をひきとりに家族や友人がやってきた。おそらくお節介で親切な寺男が知らせたのであろう。夢子には家族から搜索願いがだされていたのであろう。夢子のバッグにはGPSが

入れられていたのであろう。でなければ、もうすこし夢子の遺体か遺体を包む雪を眺めていられたであろう。家族や友人はだれも泣いてはいなかった。三年前か五年前から諦めている様子であった。あけすけな会話が飛び交い、いやがおうでもきこえにくいはずの小生の耳にはいった。お歴々の言葉を総合すると、彼女には、乙女の冠はふさわしくない。あばずれとか、すれっからしとか、ヤンキーとか、バイタがお似合いなのであった。不登校で、万引きをやり、ヤクをやり、援交をやり、不倫をやり、妊娠までしていた。ふんふんそうかと自得した。だからこそ、やはり、夢子は、乙女そのものであったのである。つと、ボードレールの詩の一節を思い浮かべる。【「放蕩」と「死」／可憐な二少女】可愛いあごを挙げ、その可憐な唇を天空に捧げた、あの美しいとしか形容のできないすがたは、世間であばずれとかすれっからしとか、ヤンキーとかバイタとか、そう呼ばれていないものには無理な相談である。1／2の神話。小生は此処にいる。夢子よ小生は此処にいる。いつでもいつまでも此処にいる。おまえは何処に行くのであろう。【陽が沈んでしまった／そして陽ばかりではない／ほかの何かも沈んでしまった】ほんとうに沈んだのか。はじけたのかもしれない。太陽が、しゃぼん玉となって。【しゃぼん玉は／どこいった／かるがるとはかない／ふれもあへずにこはれる／にぎやかなあの夢は／どこへいった】金子光晴はなにを喪ったのか、小生はほんとうはなにを喪ったのか。それは百年経ったらわかるのであろうか。十代で死んでも人は物語をもつ。自殺をしたものは尚更に。小生は泪目のまま夢子の物語を紡ぎはじめた。物語は夢子の不幸な生い立ちからはじまり、親子関係、学校関係、友人関係、家庭環境、社会環境、政治環境まで微細に織りあげてゆく。踏ん張ったけれども、自殺の原因を絞り切ることができずに、小生は頭のなかのノートを破り捨てた。たとえば新聞はテレビはネットは、「いじめを苦にした自殺」と告げる。あるいは、「失恋を悲観した自殺」と決めつける。それは原因のひとつにすぎないと小生は知っている。自殺者を自殺させるのはあくまでも憂鬱なのである。ベンヤミンは「遠方への旅の嗜好は憂鬱者に特有である」といつている。憂鬱者夢子は遠い旅を夢見てまずは秩父まで来た。それからもっと遠くへ旅立った。むろん自殺した憂鬱者と死んでから憂鬱者になった人間とでは、雲泥の開きがある。つまり糞と泥のちがいであって、似ていても本質的に異なる。本質的に異なる対象を描いても、絵に描いた餅となる。人生の本質はやはり、古い便所の穴のなかに在ったのである。(真の天才作家)夏目漱石は、女を描くのが苦手であったとよくいわれる。苦手なのではなく、女の正体と生理をわかりすぎていたために、詳細に露骨に書かなかっただけである。つと、寒空を鳥が飛び立つ。小生の空想も、飛翔する。あの鳥は巨大な鯉が変身した鵬であって、鵬は雲ほどもある翼を羽ばたかせて、天の池までゆく。かの『莊子』にあり。【北冥に魚有り、其の名を鯉と為す／鯉の大いさ、其の幾千里かを知らざるなり／化して鳥と為るや、其の名を鵬と為す／鵬の背、其の幾千里なるかを知らざるなり／怒して飛べば、其の翼は垂天の雲の若し／是の鳥や、海動けば則ち將に南冥に徒らんとす／南冥とは、天池なり】小生は物語づくりを諦めて、夢子のための鎮魂歌をつくった。完成までに三十年近くを費やしたが、出来栄は三分間弱でつくった作品同

様であった。しかも（生前指標とした詩人である）伊東静雄の剽窃。【太陽は美しく輝き／あるいは太陽の美しく輝くことを希い／手をかたくくみあわせ／しずかに夢子と私は歩いて行った／かく誘うものの何であろうとも／私たちの内の／誘われる清らかさを私は信ずる／無縁のひとはたとえ／鳥々は恒に変わらず鳴き／草木の囁きは時をわかたずとするとも／いま夢子と私は聴く／私たちの意志の姿勢で／それらの無邊な廣大の讃歌を／ああ我が夢子／輝くこの日光の中に忍びこんでいる／音なき空虚を／歴然と見わくる目の發明の／何になろう／如かない／人気ない山に上り／切に希われた太陽をして／殆ど死した湖の一面に遍照さするのに】ついでに伊東柚月の詩を捧げる。【いっそ／大きく凹もう／いつか／多くを満たす／器になるのだ】さてもそうこうして三十年経った。下天のうちをくらぶれば夢幻の如くなり。夢子は幻となり天上のどこにいるのか、知らぬ。なんの変哲もない歳月がすぎて、目はかすみ耳はとおくなり鼻もきかなくなった。脳にも空洞ができていく気がする。いずれ遠からず夢子のこともすっかり忘れてしまうのであろう。おそらくさっき話したことだって、夢子との幸福な逢瀬の百分の一にすぎまい。そうこうして、忘れてしまったことすら、忘れ去ってしまうのであろう。小生はポオ詠じるところの、あれである。【shadow】小生、寂たり、寞たり。いったい百歳になったらどうなってしまうのであろうか。再びの死を迎えるのであろうか。それともそれとも。いやいまは想像する気力さえない。死んだら人はお星様になると、こどものころにきかされたものは小生ばかりではあるまい。おとなは嘘つきである。星にも、風にも、露にも、花にもならない。ひたすら居心地わるく浮かんでいるのみである。それでたまに星を気どったり、風を装ったり、露に変化したり、花に仮託したりする。現世がつまらないのと同様に、来世もつまらないのである。一刻千金ならぬ千刻一金の小生の世界。このつまらなさをどうすごすかが、生者も死者も人それぞれの選択なのである。おおむかし禅寺で座禅を組んだことがあるが、あれに近いかもしれない。そのとき悟ったのは、三日や四日一心不乱にやっても、なにも変わらないということである。三十年や四十年継続してやっても、なにかすこし変わってくるのであろう。これが悟りである。ヘンリー・スコット・ホランドは、オペチミストである。【死はなんでもないものです／私はただとなりの部屋にそっと移っただけ／私は今でも私のまま／あなたは今でもあなたのまま／私とあなたは／かつて私たちが／そうであった関係のままで／これからもありつづけます】ことしの夏は猛暑で、冬は厳寒であった、らしい。麻痺状態が継続する小生は、寺男の身なりや立ち居振る舞いでそれを知るばかりである。そういえば女学生の姿がめっきり減った。いよいよ小生も〈忘却の詩人〉の仲間にはいったのであろう。唯一の詩集（『詞藻』）は、絶版になり文庫も打止めになった。あとは国文学者か文藝評論家が、とりあげてくれるのを待つばかりである。想えば小生は一度もブレイクしなかった。あらかじめ忘れ去られた詩人、それが小生である。そんな小生でも声高らかに訴えたい。【詩人の声をきけ】小生と同世代の詩人で、どういうわけか〈ノーベル文学賞〉を受賞した、ヨシフ・ブロツキイの言葉。「詩を書く者が詩を書くのは、死後の名声を期待してのことではありません。たしかに、詩人はしばしば、自

分の詩がたとえわずかでも自分の死後も生き延びることを願うものですが、詩を書く者が詩を書くのは、言語が次の行をこっそり耳打ちしたり、あるいは書き取ってしまえと命ずるからです」はい、了解です。されど死んだいまとなつては、自分の詩が生き残ることを、「たとえわずか」どころではなく切に願う他はない。それでも、よく想いだすのは、詩人などではなかった幼いころのことである。年のせいかもしれないし、もしかすると詩人であったころを想いだすのが、しんどいせいなのかもしれない。父はいなかったが、まだ母はいた。母は貧しく醜い未亡人であつて、且つ十種類の病気をもつ娼婦であつた。むろん貧しく醜いは小生の謙譲の美德であつて、十種類は小生の大風呂敷である。母は相手が先生であれ医者であれ議員であれ、だれかれかまわずこういうのが口癖であつた。プライドなんかもてるはずもないのに、昂然と胸をはつてこういうのであつた。「この子は末は博士か大臣かどころではなく、もっとはるかに偉大な人物になります」母は皆々に苦笑され軽蔑されつつ、咳き込みながらも凜としてそういつづけたものであつた。そういつづけることが、死期を早めることを自覚していたのに。その言葉が幼い小生を洗脳することはなく、かえつて反発を生んでいたことを知らずに、小生が日々望んだ通り、母は死んだ。小生は博士か大臣よりも、もっとはるかに墮落した人間になるべく詩人になった。忸怩たるものがないといえば嘘になるけれども、詩人は小生にとって運命と同意語であつた。母が小生にとってそうであるのと同様に。自称詩人になつて七年目になにかが消えた。なにかではない、小生が消えたのである。そうそう、つい最近、くだんの大詩人の弟子である小詩人が、詩の同人誌に、『大腹小臍論』を一挙掲載したとのニュースが、寺男の呟きによって齎された。因に寺男はマニアックな文学通、お気に入りの作家が松永延造と宮地嘉六ということだから、もしかすると現代人で読んでいるのは、寺男ひとりではないかと。ホームページやブログではなく同人誌というところに、小詩人のアナグロ趣味がわかる。余計なことはともかく、その小詩人氏であるが、歳はたしか小生より若干上。生前小生は小詩人氏の『北山行人論』なるものを、夢中で読んだ記憶がある。百年前に生きた孤高の作家、北山行人の文学性と人間性の極みを描いたもので、明治時代には、森鷗外をはるかに超える作家がいたのかと、驚嘆したものであつた。それなのに、ああそれなのに、この北山行人が小詩人氏の創作した人物であつたとは。死ぬ直前小生は偶然文中に氏の誤謬を発見した。それで真相がわかつたのであるが、半世紀経つてはいても、わかつていない読者が大半である。こういうことは年数ではないらしい。どれだけ夢中で読んだか、どれだけ適当に読んだかのちがい。そんな小詩人氏の書いた『大腹小臍論』が信用できるわけではない。それでも読みたい、なんとかして読めないものか、どうして読めないのかと切齒扼腕、一年が経つたある冬の日、小生の墓前に寺男が供えてくれた、一冊の地味な表紙の雑誌。そうかそうなのか、ここに『大腹小臍論』が一挙掲載されているのか。感謝感激しつつも、ページをあける術もない。諦めつつあつたら、大逆転。これを文字通り青天霹靂というのか、青空高く晴れわたつた、一陣の風も吹かぬ日に、小生の念力の風が吹いたのか、雑誌のページがめくれた。目がすっかりかすんだ小生にも、『大腹小臍論』の冒頭の活字は

鮮明にみえ、小生は小生がなにものであったのかを、初めて知ることとなった。【大腹小臍は忘却された詩人である。彼を知る者は日本中で十人しかおらず、彼のファンは日本中で三人の女学生しかいない】はいおっしゃるとおりである。だからどうだというのであるか。半世紀も経って、十人も三人も立派なものではないか。【大腹小臍は哀れな詩人である。貧窮していたから哀れなのではない。夭折したから哀れなのではない。詩人として未完成であったから哀れなのである】大変なはずれ。百キロメートルもはずれているといたいけれども、一ミリもはずれてはいない。だからそんなことは、疾うに自覚している。だからどうだというのか。いまは死人として未完成だ。未完成の魅力って、ありはしないか。【未完成の詩人はすくなくはない。中原中也も立原道造もいわば未完成の詩人である。それでも未完成の魅力で、日本の詩の歴史に確然たる位置を占めている。だが嗚呼しかし、中也と立原のエピゴーネンたる大腹小臍にいたっては、未完成の未を七つはつけなくてはならない】ひどい言い種である。未完成という語彙はあるが、未未未未未未未完成なんて語彙はない。ただ萩原朔太郎の『詩の原理』を、さあ読もうかというときに、死んだのはまずかった。【例をだすと立原道造風の（もしくは盗作である）この詩。それから愛はどんな風にお前に来たんだろう／陽は大きな景色のあちらに沈みゆき／あのものがなしい月が燃え立った／私らは別れるであろう／知ることなく／知られることなく／あの出会った／雲のように／私らは忘れるであろう／水脈のように／これは一体どういうことであろうか】なんとまあこんな恥ずかしい詩をつくったっけ。いや盗作したっけ。恥ずかしいけれども、そうわるくもないのではないかな。【完成された詩人はこうは詠わない。まず「愛」なんて曖昧な語彙は使わない。それと、「大きな」、「あちら」に変わるべき、具体的な語彙を発見する。「私ら」も同様である。「私ら」とは、誰と誰なのか。高村光太郎の『智恵子抄』は、「智恵子」だからいいので、『私ら抄』では、味も素っ気もない。そして何よりも「雲のように」「水脈のように」なんて、月並な形容は、死んでも用いない。加えて、本物の詩人は、「かなしい」とか「さびしい」なんていわない。別の言葉によって、悲しさ淋しさを表現する】そうはおっしゃっても。詩人だって、曖昧で非具体的な語彙と知って、それらを使いたくなることもあるんである。月並な形容だって、そうと知って用いたくなるときもある。かなしいから、かなしいという、さびしいから、さびしいという、どうしてそれがいけないのか。そらあやっぱりいけないわな。指摘されたこと、みんないけないわな。当たっているから憎らしい。小詩人氏は、よほど完成されたホンモノの詩人なんであろうな。半分皮肉であるけれど半分は本音だ。小詩人氏に必要なのは、詩人の擁護である。詩人の擁護は、詩の擁護である。シェリーを見習ってほしいものである。ザマアミロ、誤植がある。〈変わる〉は〈代わる〉が正解である。こんな臍のゴマをほじくって、溜飲を下げる小生って、みっともなくはないか。小生の品性は益々下がり、小詩人氏の文章は、いつそう格調が高くなる。【田村隆一の『四千の日と夜』をみよ。これが現代詩である。一篇の詩を生むためには／われわれはいとしいものを殺さなければならない／これは死者を甦らせるただひとつの道であり／われわれはその道を行かなければならない／

そう、詩は、詩想であり、思想である。雰囲気なぞというものは邪魔でしかない。大腹小臍は、されど雰囲気づくりに精魂傾けている】エラソウニ。雰囲気だっという雰囲気とわるい雰囲気がある。いい雰囲気をつくりたかった。されど雰囲気なぞというものは、吹けば飛ぶよな将棋の駒である。王将でも飛車角でもない、桂馬あたりかな。むろんペガサスくらい飛翔してくればいいが、あかんあかん。『大腹小臍論』の冒頭を読んだだけで、小生は死にたくなかった。おそらく、たぶん、きっと、まちがいなく、ここから先は讚美の文章で満たされているんであろうが、残念ながら読めるのは、このページだけであった。こうなったら、捲土重来、敗者復活、起死回生、剽窃無類の一篇を。【それから烈しい風はどんな風に夢子に來たんだろう／陽は追分山のむこうに沈みゆき／あの幼気な月が燃え立った／僕と夢子は別れるであろう／知ることもなく／知られることもなく／あの出会った／雲の流れとともに／僕と夢子は忘れるであろう／水脈とともに】こんなんでどうかな。再発表の場はないけれども。だが小生はその詩篇と、あの雲の流れとともに別れた。覆水盆に帰らずさ。小詩人氏によって、小生は自分が九牛一毛どころか、「九千牛一毛」であることを自覚させられた。小詩人氏の（論の）唯一の弱点は、小生の未発表の自称傑作詩をごぞんじない点であろう。自称傑作詩は、ノートに走り書きしただけのものなので、しかもそのノートは、下宿の大家さんによって焼却されてしまったものなので、読めといっても無理なのではあるが。【雨ニモマケテ／風ニモマケテ／雪ニモ夏ノ暑サニモマケテ／丈夫ナカラダハナク／欲ハアリ／決シテイカルコトヲヤメズ／イツモウルサク怒ッテイル／一日ニ三杯飯五回ト／味噌汁十杯ト多量ノ肉ト野菜ヲタベ／アラユル事ヲ／自分ヲカンジョウニイレテ／ヨクミキキシ解ラズ／ソシテ忘レテ／都会ノ中心ノ／邸宅ニ居候ヲシ／東ニ病氣ノコドモアレバ／行ッテ蹴飛バシテヤリ／西ニツカレタ母アレバ／行ッテソノ肩ニオンブシテ／南ニ死ニソウナ人アレバ／行ッテサッサト死ンデモイトイイ／北ニケンカヤソショウガアレバ／面白イカラモットヤレトイイ／ヒデリノトキハ泪モデズニ／サムサノ夏ハヨボヨボアルキ／皆ニデクノボウトヨバレ／当然ホメラレモセズ／ヒドク苦ニハサレ／ソウイウ者ニ／私ハナッテシマッタ】薰其昌の戒律にある。【万巻の書を読み千里の道を行かずんば画祖となるべからず】こらあ年期と根気がいる。詩祖になりたかった小生は、二十歳で死ぬべきではなかった。隗よりはじめよ、小生のワカガキは七十歳で詩祖になるための試作試練であったのに。後悔も愚痴も意味がない、此処。此処より永久にいくためにはどうすればいいのか。此処には神も仏もない。もう一度いう。神も仏もないのである。ないのである。たしかに小生は中原中也と立原道造の影響を受けたが、小生の好きな詩人はだれよりも山之口獮であった。そのおもいは、こういう状況になって、さらにつよくなっている。【ひとたび生れて來たからには／もうそれでおしまいなのだ／たとえ仏になりすまして／あの世のあたりに生きるとしたところで／かかりのかからないあの世はないのだ】【金ばかりを借りて／歩き廻っているうちに／ぼくはある日／死んでしまったのだ】きみたちよ、神仏は人間誕生いや宇宙誕生以来、一度も誕生しなかったのである。創造者が、想像妊娠したのみである。人びとよ、もはや荒唐無稽頼み

高踏無形頼みはやめたがよい。きみが力説する神仏とは極悪の同意語である。なぜって、どうして人間は死なねばならないのか。どうして人間は生あるときも死者になっても、これほど憂鬱でなければならないのか。なんたる莫迦莫迦しきよ。ばばば莫迦莫迦しいにもほどがある。だからもう、この話はやめよう。そうして『エレミヤ哀歌』を口ずさもう。【わたしの生まれた日は呪われよ／母がわたしを産んだ日は祝福をうけるな／なにゆえにわたしは胎内をいできて／悩みと悲しみにあい／恥をうけて一生を過ごすのか】一部のイスラム教徒は「聖戦」をさげんで自爆テロをやったりするが、そしてそれによって天国にいけると信じているそうであるが、小生のこの状況を知らせてあげたいくらいである。一部のキリスト教徒は、「殉教」を唱えて犠牲になったりするが、しかもどうあれ天国にいけると信じているようであるが、キリストが天才小説家以上の見事なフィクション（きみはわかっていようが喩え話は基本的に〈嘘〉なのである）の創造者であることを、死んでからわかってどうおもうのであるか、知りたいものである。そうだこの際だから、やや手前味噌にお化けとか幽霊のことを少々。作家とか詩人で、お化けとか幽霊とかを信じている人が、いそうである。お化け話をいっぱい書いた泉鏡花とか岡本綺堂などは、そんな気がする。生前は小生も信じていた。そういうものがないと聞だ、とすら考えていた。自分がこんなふうになって、いまは断固としていうことができる。お化けも幽霊もない。いないのである。絵本や劇画や映画などでみる、お化けや幽霊がいたらいいのにと思われることもあるし、自分がそういうものになりたいと思われることもあるが、残念ながら姿形は、いささかなりとも生あるものにはみえない。いまの小生なんか、もしもみえたなら、《うみぼうず》にみえるのか、《のっぺらぼう》に似ているのか、《ぬらりひょん》に近いのか、ちっともわからない。けれども死者が生者にみえたなら、死者はこれほど憂鬱ではない。もし透明人間なるものがいたとしたなら、たぶん死者と同じくらい憂鬱であろう。現世を横行闊歩できる透明人間は、生者であって死者ではない。だから生者に対していろんな善事も悪事もできる。ところがどっこい、死者は善事悪事どころか、普通事すらできないのだ。となるてえとおそらく、死者は透明人間の仲間どころか、正反対の存在ではないのか。いいや、透明人間は存在するとしても死者は存在しない。現在生あるものたちは、こんなふうになつてしまふことを予想もしていないであろう。何億光年の眠りにはいると考えるか、無の次元に消えてゆくと考えるか、輪廻転生の最初の一步と考えるか、そんなところであろう。小学生のころ、『喜びも悲しみも幾歳月』という映画を観て、この世はそういうものだと思認識した。その認識は当たっていたが、あの世が《喜びも悲しみも無い幾歳月》であることは知らなかった。【死者は憂鬱である／党派のない憂鬱である／死者は、憂鬱である／一個の、憂鬱である】だれがいったい、死者の独白をきいてくれるのか。だれがいったい、死者の嘔吐を始末してくれるのか。【真夜中に鯛密かに砂を吐く】さあこれで小生の話はおしまい、とおもいきや、おのれ寺男め、小生がまったく思いもつかなかつたことをやらかした。年末の、ある昼下がりに、まだ霜も解けない時刻に、マッチョ三人連れてきたものである。おそらく夢子が自殺したのち、この墓場で奇

妙な現象がある、とかなんとか、だれかが（あるいは幾人かが）風評を流したのであろう。それともスマホの〈おぼけゲーム〉でもやっているのか。どういう魂胆なのか、三人とも濃いヒゲを生やしている。クチ髭の男、アゴ鬚の男、ホオ髯の男。それぞれに背負っている荷物を置いて深呼吸をした。荷物は禍々しく物騒なかんじのものであった。クチ髭が小生の墓の側に幟を立てた。〈幽鬼退治請負社〉とあった。だれがいったか、「詩人は犯罪者に似ている」とんでもない。小生はいいたい、「ヒゲヅラは犯罪者に多い」連中は整列して、いろんな神といろんな仏に祈った。十字を切り、掌を合わせ、手を打ち鳴らし、土下座して、礼拝までした。もちろんのこと、小生は楽観していた。キマイラ（不可能性の怪獣）に立ち向かったといわれる、マラルメの教えを乞いたいが、どうせそのすべもない。わが憧れのバイロンよ。小生も義勇軍をつのって闘いたいけれど、どうせそのすべもない。【君の歳月の、歓びの時々をかぞえてもみよ／悩みのなかつた日々をかぞえてもみよ／そして知れ、君が何ものであったとしても／生れざりせばよかりしものを、と】お化けも幽霊も鬼も、神も仏も、いないんだよ、いるわけないじゃないか。そう目一杯ロ一杯さけびたかったが、さけんでも相手の耳に届かないのはわかっている。マッチョのくせに機敏なこのアナログ軍団は活動を開始した。この世には、あの世にも、幽霊とかお化けとか鬼とか、そういう類いのものは、いない。小生もそういう類いのものではない。ちちちちがう、まったくちがう。それなのに、ヒゲ十字軍カルテットはなにを血迷ったか、焚火をはじめた。（その地点は、むかし小生の空想力が盛んだったころ、とても小さなカフェをつくったところである）あのカフェは放火されたのである。放火魔は、焚火のなかに芋ではなく鼠花火を大量にぶちこんだ。忌々しい輩がわが小宇宙を飛び跳ね、煙が充満した。狐狸を燻しだすやりかたでなにをするつもりであろう。小生を燻しだしてくれれば、ありがたや。また現世に逆戻りできるのか。けれども咽せるばかりでその徴候はない。アゴ鬚が呪文を唱えはじめた。ホオ髯が踊りはじめた。クチ髭はとみると、零下をものともせず全裸になった。みたくないものをみせて、小生に嘔吐を催させる気か。これでわかった。この連中は三バカ大将にまちがいはない。次にドローン飛ばした。なるほど、小生の気配を察知したいのか。小生は息を止めた。元々息はしていないんだが。ときは経ち、ドローンの効果はゼロで、クチ髭はくしゃみを連発しはじめた。そうか、小生に風邪をうつす気か。たそがれがせまっていた。ムチャーリの夕暮れ。【夕暮れがやってくる／健康体の／毛穴から沁み入り／からだを徹底的に破壊してしまう／恐れられた病気のように】アゴ鬚はアゴが疲れたのか呪文の呂律がまわらなくなっている。ホオ髯の踊りはどう鼻屑目にみても酔っぱらいの千鳥足。憐憫の情が湧いた。そんなに退治したいなら退治されてもいいと思われた。退治されるべきとすら思われた。望んでこんなことになっているわけではない。現世に逆戻りできないなら、せめてひとおもいに消してほしい。結果的にはしかし、この憐憫の情が命とりであった。三バカ大将は小生の情にかんづいたのか、突然奮起したのである。クチ髭がバズーカ砲をかついだ。アゴ鬚が補助をする。ホオ髯が砲弾をこめる。合図もなく発射された。砲弾はなぜか、真っ赤に燃えた太陽さながらの、林檎であった。

まちがいなく林檎であった。三バカ大将どころか三アホ大将ではないか。余裕の小生はどうぜん鼻歌をうたった。「赤いりんごに／唇よせて」「りんごかわいや／かわいやりんご」林檎砲弾は次から次へと飛んでくる。こんなに飛ばしてどうするつもり。林檎の墳墓ができるだけじゃ。よける必要もないのによけながら、莫迦莫迦しさに、烈しく身悶えした小生は、全く思いもつかなかった事態に遭遇するのである。油断大敵、もっと早く気づくべきであったのである。三バカ大将でも三アホ大将でもなかった三銃士は寺男同様に文学通なのであった。文武両道の騎士たちは、〈変身者退治法〉を知っていたのであった。気づいたときにはすでに一個の林檎が、よそみした小生の背中にめりこんでいたのであった。おのれおのれ。手も足も届かない背中の、ど真ん中に命中したのであった。こんどは激痛のために、烈しく身悶えする羽目になったのである。(これも快樂だ)と小生は自分にいいかさせた。ドストエフスキーの小説の主人公は「痛みにだって快樂がある」と嘯いているけれども、痛みに快樂を求めでもしなければ、耐えられそうにもないからである。こっちの姿がみえるはずのない連中は、たぶん空中に浮かぶ林檎を見て確信したのであろう。何度もバンザイをした。荷物をまとめると揃って合掌をした。夕陽が勝ち誇っている。ロルカだって一回しか殺されていない。小生は二回殺されるのか。一回目は、病原菌という殺し屋に、二回目は、ホンモノの殺し屋に。午後の五時に。【午後の五時／傷が太陽のように燃えていた／午後の五時】長ったらしい合掌が済むと整列して厳かに去っていく。声にならぬ叫声を無視して。きみたちは大きなまちがいをおかした。なによりもきみたちは食べものを無碍に扱って、あげく無駄にした。そんな輩にむざむざやられるなんて、とんだザムザである。グレーゴル・カフカの背中の林檎は腐り、傷は化膿する。動けぬ喋れぬ食べられぬ。ひひひ乾涸びて死ぬるのである。絶望のなかで死ぬるのである。家族は再び生き活きとした生活に戻るのである。小生のばあいはどうなるのであろうか。小生はどうなるのであろうか。林檎が萎びてはずれ、傷口が治癒するのであろうか。そんなことはあるまい。再びの死がやってくるのであろうか。そんなことはあるまい。救い主がやってくるのであろうか。そんなことは絶対にあるまい。【みわたせばはなももみじもなかりけり】激痛に、耐えがたきを耐え忍びがたきを忍びながら、こうしてこれから先、何億光年もこのまま、母にも夢子にも会えずに、ゆらんゆらん浮遊しつづけるのであろう。小生は絶望し、絶望しつつ、敬愛する魯迅を想い、繰り返し繰り返し諳んじるのである。【絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい】／完

*

*

一気に読了した郷田は、しばし呆然としていた。

純文学とも感じなかったし、傑作とも思わなかったが、大きな示唆を受けたのであった。

こういう無手勝流の文体が、新米の自分に書ける自信はむろんなかったが、(そうか、そうなんだ)

と確信することがあったのだ。

(死者の側からの、こういう書き方がある、自分が書いている原稿は、本来こういう書き方をしなければいけなかったのだ)

山内参三の超ベストセラー『死んだる団』は、ノンフィクション・ノベルだから、探偵舟木英介、麻暮正作、刑事山風順一の活躍を、事実即して描いていく。

荒野大三郎の思想(死想)によって翻弄され死んでゆく、高杉京平、藤上吾郎、辻中亀夫ら【死んだる団】メンバーの会話は書いても、かれらの内部にはいることはない。

僕の小説は、とうぜん虚実皮膜のはずだから、死者たちの声を書けるのだ。

そういうことは、ノンフィクション・ノベルでは不可能であって、そこに唯一、山内参三作品を凌駕できる可能性が秘められているのだ。

おもいに耽っていたら、時間が過ぎてしまっていた。

郷田は慌てて、到着ロビーに向かった。

第五部／第三章

こうしてわれわれはまたも孤独だ
セリーヌ

ことさらに人の恐ろしいことは
交尾しなくてもすむのに交尾をするのだ
村上昭夫

二〇三二年、一月十五日、午後八時。

麻暮正作は、ギャバンの鎌倉探偵事務所にいる。

郷田は麻子と共に、すでに自邸へ引き上げた。

麻暮はギャバンと、おりいって話があるために残ったのだった。

「それで、どうだった、荒野と蝶子のその後の様子は」

開口一番麻暮が聞くと、ギャバンはじつに云いにくそうな顔をした。

「いいかね、ギャバン君、探偵は依頼人に真実を伝える義務がある」

「解っています、麻暮先生、しかし」

「先生も、しかしも、やめなさい」

「はい、先生」

「まあ、深呼吸をしてからだね」

云われたとおりにギヤバンは深呼吸をしてから口を開く。

「例によって、あの天井から侵入し、屋根裏の様子を確認しました。

そこには、ぼくなんかの想像を絶する有様があったのです。

蝶子さんは、全裸でセックスをしていましたが、相手はロボットでした。

つまり、女性用のセックスロボットの開発が完了していたのです。

しかも驚いたことに、蝶子さんの様子を近くで黄金仮面が、満足そうに見つめていることでした」

「そうか」

麻暮は驚きもせず、昂奮もせず、腕組みをした。

「黄金仮面は、もうバイアグラも効かなくなっただんですかね」

「そういう単純なことではない」

「いずれ、動くダッチワイフ、男性用セックスロボットも、開発されるでしょうね」

「そうなるね。

だが、そいつの役目はレイプ防止しかない。

荒野のいちばんの目的は、とくに肉体面で女が男を必要としない世界だ。

結果、女が子供をまったく産まなくなる、畢竟、人類滅亡。

それが荒野の今回の計画さ」

麻暮は断言した。

まったく予想しなかったことではなかったが、

(ここまでやるか)

と、荒野の執念に、人類滅亡の執念に、感心すらした。

「たしかに、セックスロボットは、セックス用ペットやバイブレーターとは較べられない、女性の最強パートナーでしょうが、女性にはこれがあるでしょう、これが」

ギヤバンは自分の胸に手を当てた。

「これこれ、ケケ、母性本能かい」

「そうです、ポセイドンです」

「荒野のことだからおそらく、そういうものにも対応した、ロボットづくりをやっているんだろうよ。

もう一、二回侵入すれば、セックスロボットに対する、蝶子のママぶりが見られるかもしれないぜ」

「ママと云えば、蝶子さんには、大介くんという息子さんがいるはずですねえ」

「ボクも詳しくは知らないが、蝶子様子をずっと見たり聞いたりしていると、おそらく大介くんは亡くなっているね。

病気なのか、何なのか、もしかすると、荒野の配下に抹殺されている可能性もある。

むろん荒野の指令でね」

「しかし、黄金仮面の息子でもあるのでしょうか」

「そういうことは、ケケ、荒野には関係ないんだ。

荒野に、不可能の文字はない。
少なくとも、ケケ、荒野自身はそう考えている」
ギャバンは空を見つめて、
「でも、黄金仮面は、ミライ何とか研究所とかを背景に、カワカミ博士とかキノシタ博士とかの有能なブレインを抱えていたとか。
でもいまはもう、そういう力は持っていないと、前に郷田先生に聞きましたが」
「それがさあ、困ったことに現代人というやつは、きわめて金に弱い。
ケケ、大金を積めば、くそったれの愛もゲットできるという時代さ。
電撃小僧と電撃隊がいい例でね。
ああいう驚異的で歴大な、殺人軍団を抱えられるだけの、金力と脳力が、荒野には備わっているんだ。
昔話だが、荒野は北山極斎と名乗る、美術界の巨匠でもあった。
当時極斎の絵画は、号を問わず一枚十億円と云われていた。
また、荒野は日下典禪と名乗る、新興宗教の教祖でもあり、信者の寄附が毎年百億円と云われていた。
猟師と探偵でコツコツやってきた、ボクなんかとはスケールがちがうんだ。
新しいブレインが続々と、荒野のもとへ馳せ参じているはずさ」
「そうですか。
ようやく解ってきました。
麻暮先生が、どうして黄金仮面を倒そうとしているのか。
人類滅亡の悪魔と、人類救済の天使との、永遠の戦いですね」
ギャバンの顔は紅潮し、鼻息も荒かった。
麻暮はやれやれというふうに鉄仮面をゆさぶり、
「ボクは天使でも救世主でもない。
そんなことは、決して決してないんだ。
なぜなら、考えてもごらんよ。
生まれたときから死ぬことが運命づけられている、哀れな人間にとって、人類滅亡こそが最大の救いなのかもしれない。
となると、ケケ、荒野が天使で、ボクは悪魔となる。
要するに、何が正解か、だれにもわからない。
そして、ボクがやってきたことに、人類救済なんて発想ゼロなんだということは、ケケ、ボクがいちばん知っている。
荒野を、そして荒野の配下を、倒そうと奮闘しているときだけが、ボクにとっての生き甲斐であって、ケケ、ただそれだけ。
ボクはいつからか、探偵ではなく、ケケ、殺し屋になってしまったんだよ。
しかも、殺しの依頼人はボク」
麻暮は静かな声で云った。
「それなら、いよいよ、黄金仮面を倒すために」
「そうさ、そのために、マドレーヌと別れてきたんだよ」

(どういふわけか)

とギヤバンは思ふほかはなかつた。

(どういふわけか、麻暮先生と郷田先生の、生き方はよく似てゐる)

(第六部に続く)